

アメリカの科学館におけるバリアフリーの取り組み

根本しおみ(川口市立科学館)

アメリカの科学館では、障害があるお客様にどのような取り組みをしているのか、視察に行ってきたので報告する。

1. 実践対象

英語では、「バリアフリー」ではなく、Accessibility という表現を使っている。障害がある人だけではなく、子供、お年より、英語を話さない人など、全ての人にとって館を「アクセスしやすく」する実践である。

2. 実践可能な場所、必要な道具や準備

科学館のバリアフリーについて調査したが、予算とやる気に応じて、専門業者もいるし、職員の手作りもできる。

3. 実践例

3.1. アメリカ障害者法

アメリカでは、1990 年にアメリカ障害者法が成立し、博物館のように多数の人が集まる場所の設備に関して、細かい規定が作られた。以下に科学系博物館に義務付けられた規定の例をあげる。

(1) 全体に関して

- ・ 車椅子の人のために、通路の幅を確保し、段差のある場所にはスロープをつける。
- ・ 貸出用車椅子を常備する。

(2) 展示物に関して

- ・ 子供や車椅子に乗った人にも展示物が見やすいよう、展示卓の高さは規定以上の高さにしてはいけない。
- ・ 自動で流されているミニシアターのビデオにも字幕を付ける。(写真1)

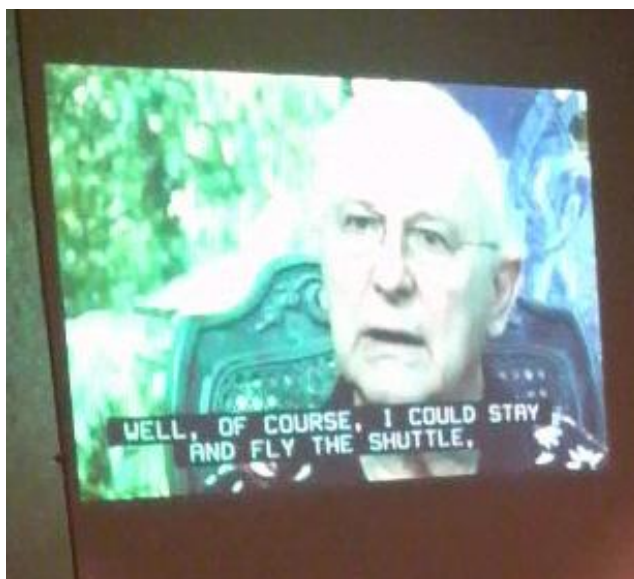


写真1 字幕付のビデオ

(3) プラネタリウム・IMAX シアターに関して

- ・ 視覚障害者用には音声ガイド(副音声を聞けるもの。)、聴覚障害者用には字幕システムを、必要な人が来た時にすぐ提供できるようにしておく。

3.2. 視察に行った各館の取り組み

(1) アメリカ自然史博物館

視覚障害者向けには、触れる展示(写真 2)を回るタッチツアーがある。(開催は不定期)

聴覚障害者向けには、手話による館内ツアーがある。(月 1 回開催)



写真 2 触れるミミズ

(2) 国立航空宇宙博物館

プラネタリウム・IMAX シアター共、視覚障害者には副音声の聞ける音声ガイド、聴覚障害者向けには字幕を出すことができるよう、常に準備されている。音声ガイドは英語を母国語としない人も楽しめるように、スペイン語、フランス語、日本語など多国語に対応している。しかし、字幕は後から出す場所を作ったので、画面と一緒に見やすい視線の方向には付けられず、見づらい。

(3) ボストン科学館

この館の天文展示には点字がついている。(写真 3)天文展示だけではなく、館内の展示物はほとんど、触れるようにカバーを付けていない。(写真 4)展示物の解説は読むだけではなく、英語とスペイン語で聞けるようになっている。

また、視覚障害者がプラネタリウムを見に来た時には、点字の解説がつき、星のある場所が立体的に触れるようになっている点図を配布して、触りながら解説が聞けるように常に準備されている。館で点字を打てるプリンターを持っているので、必要な時には点字の資料が作れるようになっている。



写真3 点字



写真4 惑星の模型に自由に触ることができる。
奥のコードが付いた受話器のようなもので解説が聞ける。

ボストン科学館では、このような取り組みをアメリカ障害者法が制定される前から始めている。館をあげて、どんな人でも科学館に来て楽しんでほしい、という気持ちがあることが伝わってくる館であった。

4. 実践上役立つヒントや留意点

アメリカ自然史博物館、国立航空宇宙博物館ともアメリカの代表的な科学系博物館である。ホームページを見ると、障害がある人、英語を母国語としない人など、あらゆる人々に対するアクセシビリティのための設備がそろっている。しかし、それは館が自発的に取り組んだ結果としてのものばかりではなく、アメリカ障害者法を守るために備え付けられたものである。年間一千万人の来館者があり、多くの人に安全に楽しんでもらうことが一番の目標となっているなかで、個々の来場者のニーズを相手の立場に立って考えるところまでは余裕が無いのが現状のようである。

5. 実践例の評価

当館でも、聴覚障害者のために字幕付きプラネタリウムを投影している。ところが、肝心の聴覚障害者がほとんど見に来てくれない。どうして準備して待っていても障害者が来てくれないのかが知りたくて、今回のような視察を思い立った。



写真5 Ms. Noreen Grice

ボストン科学館の Ms. Noreen Grice (写真 5) に「どうして準備して待っていても障害者が来てくれないのでしょうか？」と質問したところ、
「私が視覚障害者向けにプラネタリウムを始めた時も、同じように視覚障害者が来てくれなかった。設備を整えて待っているだけでは障害者は来てくれない。科学館が障害者にとっても楽しめる場だということを伝えないといけない。まず、こちらから素材を持って盲学校や聾学校に出向いて行って、科学館が”Welcome!”という気持ちだという事を伝えなければいけない。」

準備して待つだけではなく、まず、「障害のある人間が科学館なんか行っても歓迎されないだろうし、つまらないだろう。」という障害者側の考えを払拭しなければいけないのだということを、彼女の言葉で初めて理解した。アクセシビリティの障害となるものは、物理的なものだけではなく、心理的なものもあったのである。

この教訓を受けて、当館でも来年度は聾学校に天文の「出前授業」を実施できるよう、努力していきたい。また、年4回だけではなく、聴覚障害者が来た時にはいつでも字幕を出せるようなシステム作りも考えていきたい。

6. 一般市民への天文学教育普及活動へのフィードバック

今回、多くの参考になる意見や取り組みを話してくれた Ms. Noreen Grice は You Can Do Astronomy という組織の代表でもあり、数多くの「見ても触っても楽しめる」天文の書籍を出版している。「なぜあなたは天文教育の Accessibility を研究なさっているのですか？」と質問したところ、

「まず、私がプラネタリウムや天文学が好きだから、他の人にも同じように楽しんで欲しいと思っている。誰でも、年をとれば足は悪くなるし、目も悪くなるし、耳も遠くなる。英語を理解できないお客さんもある。字幕システムや、音声ガイドは聴覚や視覚に障害がある人のためだけではなく、年をとったり、外国から来た人のためでもある。車椅子に通りやすい道は、ベビーカーにも通りやすい。障害者に対して、Accessibility が良くなるように考えていけば、全ての人にとって楽しめる科学館になる。また、目の見えない人、耳が聞こえない人だけを集めて特別なプログラムを作ることが科学教育への Accessibility ではない。どんな人も、周りの人と一緒に同じ物を見て同じように楽しめるようにすることが科学教育の Accessibility である。」

と答えてくれた。私も同じ意見であるし、これからもこの気持ちで天文教育のユニバーサルデザインに貢献していきたいと思う。

7. その他

助成 財団法人カメイ社会教育振興財団（仙台市）

8. 参考文献

- [1] Ms. Noreen Grice の You Can Do Astronomy ホームページ
<http://www.youcandoastronomy.com/>